

後世に語り継ぐ

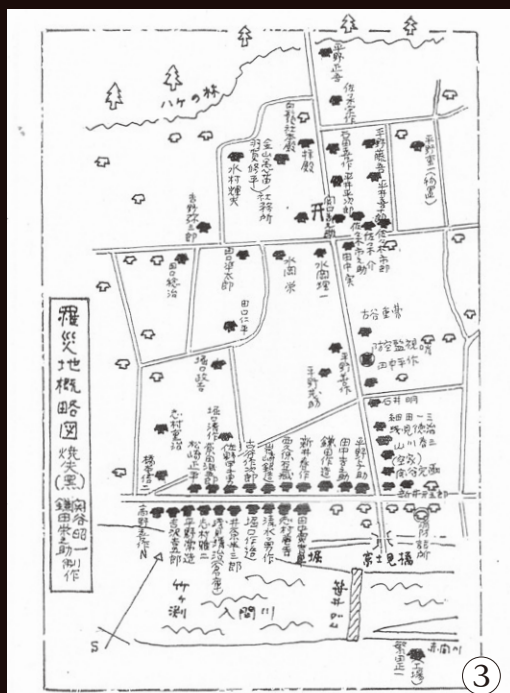
29 笹井戦災の跡地

80年前の記録と記憶

終戦から80年を迎える今年の夏、かつてその過酷な戦火は、狭山の地や狭山に縁がある人たちに降り注ぎました。ニュースを見ていると毎日のように、世界中のどこかで争いが繰り返されているのを目にします。今月の特集では、市が取り組む平和事業についてお伝えするとともに、戦争について後世へ語り継いでいる方々からお話を伺いました。



▲撮影／米国戦略爆撃調査団 所蔵／米国国立公文書館



①笹井白髭神社前の標碑 ②笹井地域で発見された焼夷弾の残骸 ③空襲の被害に遭った笹井の住宅図 ④陸軍航空士官学校(現在の航空自衛隊入間基地)の学生が小川豊子さん宅の前で撮影した写真



狭山市が取り組む平和事業

戦後80年狭山市戦没者追悼平和祈念式典

戦後80年を迎えるに当たり、改めて戦没者を追悼するとともに、平和祈念講演会の開催を通じて恒久平和を祈念するものです。

■内容 第一部 戦没者追悼式 第二部 平和祈念講演会

平和祈念展示資料館(東京都新宿区)から、「兵士」に関する資料を借用して会場内に展示します。また、本記事で紹介している中島寿々江さんが、講演者として登壇します。

日 時 10月17日(金)、13時～15時

場 所 市民交流センター

問合せ 福祉政策課 ☎2937-7562 か社会教育課へ ☎2946-8594

参加申し込みについては、広報さやま9月号に掲載予定です

▶写真は平成27年に実施した、戦後70周年狭山市戦没者追悼平和祈念式典の様子



開催予定の平和祈念事業など

事業名	内 容	日 時	問合せ
学社融合 平和祈念講演会	堀兼中学校の生徒が戦争と平和について学びグループで発表	8月15日(金)、9時50分～13時	新狭山公民館へ ☎2953-9034
平和祈念フェスティバル “Peaceいりそ”	戦争にまつわる物語を箏や尺八の演奏とともに語る	8月16日(土)、13時30分～15時30分	入曽地域交流センターへ ☎2959-3004
平和講座 朗読	語り部グループ「ななこ会」による物語の朗読と和楽器の演奏	8月17日(日)、14時～16時	広瀬公民館へ ☎2953-6500
紙芝居と語りで知る昔の戦争	小学生に向けた戦争に関する紙芝居の読み聞かせ	8月22日(金)、10時～11時30分	中央公民館へ ☎2952-2230
戦争体験者の証言映像の貸し出し	戦争を体験した語り部による証言映像DVDの一般貸し出し		中央図書館へ ☎2954-4646
平和に関する図書の展示	①「平和～きずつけあうことなくみんなが笑える世界～」 ②ミニ特集展示「平和を考える」	①8月15日(金)まで ②8月17日(日)まで	〃
冬期企画展「狭山に残る戦争の記憶と昭和の暮らし(仮)」	狭山市内に残る戦争の記録と昭和時代の暮らしを振り返る企画展	12月20日(土)～8年2月8日(日)	博物館へ ☎2955-3804

次のページ 語り部たちが戦争のエピソードを紹介

証言1 笹井の空襲

語り部 小川豊子さん

プロフィール

戦災の語り部の第一人者だった故今坂柳二氏から託された文献と伝え聞いた話を基に、地元のこどもたちへ戦争の悲惨さを伝え、生きることの大切さを語っている。



のどかな農村が 戦火に包まれる

空襲があったのは、昭和20年5月25日の夜のことです。1機のB29爆撃機が数トンもの焼夷弾を笹井の中心地に落としてきました。死者13名焼失家屋69軒罹災者346名、のどかな農村の笹井地区に、まれにみる大きな被害をもたらしました。

中心地から離れた所で暮らしていた姉たちは、ガタガタと全身が震え大人に縋っていたと言います。実際に罹災した方たちから伝え聞いた話によると、空襲が始まった途端、稲妻のような光が見え、すさまじい音がすると同時に辺り一面に炎が燃え広がったそうです。周囲の家が燃える音や焼夷弾が炸裂する音、人々の悲鳴が入り混じり地獄の



▲笹井白髭神社の本殿前の奏上門。一部が焼夷弾で焼け焦げて炭化している

ような光景だったと聞きました。それを物語るように、笹井地域の土壌を掘り起こすと、焼夷弾の残骸がいたるところから出てきました。

当時の様子を伝える 「チューリップのパンツ」

空襲はたった一晚の出来事でしたが、多くの人の人生と心に深い傷を残しました。今坂氏が戦災のことを当事者と語り合う場を設けることができたのは、戦後33年も経ってからのこと。それまではつらくて語ることができなかったのだそうです。それでも、今坂氏は被災者や戦地に赴いた方から聞いた多くの体験談を活字に残してくれました。戦時中に生まれていなかった私が、笹井戦災の語り部をできているのもそのおかげです。また、私が語り部として使っている「チューリップのパンツ」という実話を基に作られた紙芝居があります。この話の登場人物である井原嘉代子ちゃん、小学校4年生わずか10歳で焼夷弾の直撃を受けて亡くなりました。他に「火柱ものがたり」では、疎開していた孫6名が逃げ遅れ、玄関で重なり合って焼死していたという話も語ります。語る度に苦しく切ない気持ちになります。

「戦争を知らない世代」に 伝えたいこと

現在、私は「語り部グループななこ会」で学び、いろいろな所で笹井戦災の話をしています。きっかけは8年前、今坂氏から笹井小学校での戦争体験授業に誘われたことです。その後、こどもの

頃に戦災に遭ったという人から当時の話を聞く機会があり、地元である笹井に悲惨な戦災があったことを伝えていきたいと思うようになりました。「戦争を知らない世代」と言われている現代のこどもたちに、実際に戦争を体験された方の記憶や今坂氏から受け継いだ話を、色あせることなく語り継いでいかなければならないと思っています。また、80年前笹井にこのような戦災があったことを知らない多くの人たちにも、伝えていきたいです。

いつも語りの終わりに、現在世界中のどこかで笹井の空襲以上の爆撃に遭っている人たちがいることにも目を向けてほしいと話します。現在の平和で豊かな暮らしに感謝すること、友達や周りの人と対話すること、相手を認めることを忘れないで、日々の生活を楽しく送ってほしいと伝えていきます。



▲紙芝居「チューリップのパンツ」



証言2 広島原子爆弾

語り部 中島寿々江さん

プロフィール

昭和9年1月26日生まれ。原子爆弾(以下、原爆)投下当時11歳で広島市の自宅で被ばく。幸い命は取りとめたものの、祖母や叔母を失うとともに、本人も戦後数十年にわたってさまざまな後遺症に悩まされる。

今でも脳裏に焼き付く 原爆の閃光

私がもともと住んでいたのは、爆心地から約1kmの場所にある大手町という地区でした。しかし、原爆が投下される一週間前、四国で働いていた両親と弟の職場が空襲で焼けてしまい、地元広島へと戻ってきました。そのため、一緒に暮らすことができた家へと私も引越していました。爆心地から約3kmの位置にある大州という地区です。大州では爆心地から比較的距離がなかったことから、爆心地ほどの被害を受けず、私や両親も一命を取りとめることができました。しかし、大手町の家で暮らしていた祖母や叔母、その他にも近所に住んでいた方々は皆、帰らぬ人となりました。

爆心地と比べれば大きな被害は免れましたが、原爆が投下された瞬間は、私



▲撮影／米軍 提供／広島平和記念資料館



▲撮影／米国戦略爆撃調査団
所蔵／米国国立公文書館
▲原爆投下後の大手町周辺の様子

長きにわたって
体をむしばんだ放射線
原爆の恐ろしいところは投下後しば

の元にもすさまじいエネルギーの光が降り注ぎました。それは毎日見ていた太陽の光とは比べものにならないほどのまぶしさで、今でも忘れたくても忘れることができません。その直後に強烈な音と衝撃に襲われ、家の窓ガラスなどは一瞬で吹き飛んでしまいました。原爆の威力は本当に恐ろしいもので、爆心地から2kmの範囲はほぼ全てが焼失してしまいました。大手町にあった家についても、父が現場を確認しに行くことができたのが、投下後しばらく経ってから。記憶をたよりに家があった場所へなんとか辿り着いたものの、何がどこにあったかも判別できないほどに壊れていたそうです。この家に暮らしていた祖母は玄関付近で全身真っ黒になった状態で見つかりました。行方が分からなくなっていた叔母は、全身にひどい火傷を負った状態で助けを求めて歩き回った末に、8月18日に亡くなったと後から聞かれました。

語り継いでいかなければ ならない核兵器の恐ろしさ

らく経ってからも、放射線が人体に大きな影響を与えることです。私も長い期間、放射線の後遺症に苦しみました。何より一番つらかったのが、しばらくこどもを授かることができなかったことです。最初に妊娠した時は、小頭症を患った状態のこどもが、亡くなった状態で産まれてきました。その後も三度死産を経験し、こどもは諦めなければならぬかと覚悟していた矢先、結婚して9年目で突然元氣なこどもを産むことができた。その後さらにもう一人子宝に恵まれました。どこかで「自分は長く生きられないんじゃないか」と思っていました。元氣に生まれてきてくれたこどもたちから生きる氣力をもらいました。

長く苦しまされてきた後遺症は60代を過ぎた頃から突然和らいでいき、気が付けば91歳まで元氣に暮らすことができました。これも亡くなった方たちから、核兵器の恐ろしさを語り継いでいく使命を託されたということだと信じています。

戦時中、当時の科学の粋を集めて開発された原爆ですが、本来科学の力というものは人の暮らしを豊かにするためのものだと思っています。今後どれだけ人間の力が進化していても、誤った方向に使われることがないよう、それを担う若い世代の方たちには、広島で起こったことをこれからもずっと語り継いでいってほしいと思います。

証言3 シベリア抑留

語り部 増田正博さん

プロフィール

父の増田正治^{しょうじ}さんは、終戦後、約5年にわたって旧ソビエト連邦(以下、旧ソ連)の捕虜として抑留を経験。令和3年、正治さんが生前に当時の記憶を語った音声をもとめた書籍「我が生涯-増田正治回顧談-」を親族などと共同で発刊。



結婚したばかりの妻と
お腹の子を残して

私の父、正治が現在の韓国へ向かう軍に入隊したのが昭和19年7月28日のことです。狭山からまさに出征しようとしていた時に、結婚して6カ月の母から妊娠2カ月(お腹の子が兄の正敏)であることを聞かされたそうです。当時、戦争へ行く際には「お国のため」という大義名分のもと、戦死して帰ってくるのが名誉とされる雰囲気がありました。そうした中でも父は、母とお腹の子のために絶対に生きて帰ってくる、と固く誓ったと聞いています。母とお腹の子、家族2人を残して戦地へ発つ時の父の心境を推察すると胸が詰まります。

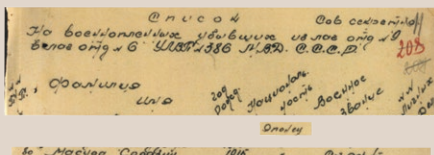
その後、現在の韓国・大邱(テグ)で軍務にあたり、翌年8月15日に終戦を迎えました。現地にて武装解除され、すぐに日本へ帰還できると信じていたのですが、そうはならなかったようです。21年5月、捕虜となった多くの日本人を乗せた船は、旧ソ連のポシエト港へと到着し、そこからさらにシベリア鉄道に乗せられて、旧ソ連領の内陸部へ送られていきました。



▲父・正治さんと母・敏子さんの婚礼写真。出征する5カ月前の昭和19年2月に撮影

過酷を極めた
収容所での抑留生活

連れて行かれた先は、現在のウズベキスタンのタシケントやアングレンなどで、計10カ所以上の収容所を転々としたそうです。当時の生活は過酷を極めるもので、食事は1日350gの黒パンと、お湯に雑穀のカスのようなものを入れたスープだけ与えられていました。そのせいか、出征前は70kg近くあった体重は帰国時約半分程度になっており、外見だけでは知り合いに気付いてもらえないこともあったそうです。従事した作業も、特にアングレン収容所での石炭採掘は、過酷なものだったと聞かされています。石炭の粉塵だらけの中、口の中が真っ黒になるまで作業を行い、後にも先にもこれ程嫌だった仕事はないと語っていました。ただ、長い抑留生活の中には、時に心温まるエピソードもあつたようで、ウズベキスタンの人たちと共同で行った運河建設では、食料の差し入れを受けたこともあつたそうです。これは、少ない食料



▲ロシア政府から提供された正治さんの抑留者名簿の一部

だけ与えられている中でも懸命に働く日本人労働者の姿に現地の人たちが感銘を受けたことによるものでした。国同士の争いで始まった抑留生活も、人対人向き合ってみると、お互いに尊敬できる部分がたくさんあつたのではないのでしょうか。

収容所生活も4年半を過ぎた頃になると、父も帰還が叶うのはいつかいつかと、自分の番を待ちわぶる日々だったそうです。しかし、帰還の許可を得るためには数十日間にもわたる過酷な取り調べを受ける必要があります。収容所での行動から思想に至るまで細かく調査をされたと聞きました。なんとかこれを取り切り昭和25年2月、ついに旧ソ連の極東ナホト力から帰国船「高砂丸」に乗って、京都の舞鶴港へ帰還を果たしました。

父が成し遂げた
偉業を胸に

私は、父が帰国した後に生まれたのですが、生前、父は抑留生活の話はあまりしようとせず、経験したことについて深く知る機会もありませんでした。しかし、カセットテープ13巻に残された音声をもとに書籍を作成する中で、父が過酷な生活に耐え、残された家族や日本のために必死で生き抜いたことを知り、心の底から尊敬の念を抱いています。

今まさに父が抑留された旧ソ連の地域で戦争が行われていますが、やはり戦争からは憎しみや悲しみが生み出されるだけだと思います。一日でも早く、世界各地の戦争や紛争が終わり、平和な暮らしが戻ることを願っています。



証言4 インパール作戦

語り部 岡本泰裕さん

プロフィール

菅原二丁目自治会長。父の岡本幸雄さんが、昭和17年に南方戦線へ出征。現在のベトナムやタイを転戦した後、旧日本軍が決行した作戦の中でも特に過酷だったとされるインパール作戦に従軍。

インパール作戦とは

昭和19年3月から7月にかけて、実行された作戦。インドのインパールを制圧するために、ビルマ（現在のミャンマー）を起点に約9万人の兵士が投入された。山間部を超える行程だったことや途中で物資が尽きたこと、伝染病が蔓延したことから、約6万人もの死者が出たとされている。

予備士官学校を経て 南方戦線へ

私の父は、大正8年に福岡県の飯塚市で生まれました。開戦後、予備士官学校を卒業し、昭和17年に南方戦線へ出征しました。当初配置された現在のタイやベトナムは既に日本軍による統治下となっていたことから、そこまで激しい戦場ではなかったようです。現地ですぐ小さいトラを飼っていたことやバナ

*戦時中、将校となる人材が不足したため、臨時で下級将校を育成するために設立された学校



▲父・幸雄さんと母・嘉寿子さんの写真



ナをたらふく食べたことなど、比較的に明るい話として父から思い出を聞かされたこともありました。しかし、戦況が悪化し、徐々に米軍や英国の軍に戦線を押し戻される状況下で立案されたインパール作戦に配置されたことで、父の状況も一変したようです。

命からがら逃げきった 撤退戦

戦後、父はインパール作戦についてだけは、ほとんど話そうとしませんでした。それだけ、思い出したくないという記憶だったのだと思います。過去に聞かせてもらった数少ない話の中からお伝えすると、父が所属していた第31師団はビルマを脱し、インパールの北側で英国軍の要地となっていたコヒマ

恩賜のたばこの煙を 見つめながら

へ攻撃を仕掛けました。しかし、結果は多くの人に知られている通り、前線への補給が続かず総崩れ。撤退する道中はまさに地獄そのものだったそうです。マリアンなどの伝染病と飢餓に苦しみながら、同時に迫撃砲の砲弾の破片で左腕を負傷しました。戦車のキャタピラ音に怯え、痛みを耐えながら戦闘機の機銃掃射から必死で逃げ回り、ぎりぎり命をつないだとのことでした。また、父は予備少尉という隊の指揮を執る立場だったことから、道中で助けることができなかった多くの部下たちのことを思い、責任を重く感じていたようです。

父から聞いた話の中で最も印象に残っているエピソードがあります。コヒマへの総攻撃を直前に控えた日のこと、隊の将兵一人につき一本、菊の紋章が入った恩賜のたばこが支給されました。そのたばこをふかして煙を見つめながら「私の命はこのたばこ、たった一本分か」と思ったそうです。

時を経て、私自身も職場でのご縁で恩賜のたばこを頂く機会がありました。たばこに火を付けて煙を見つめながら、父の話を思い出して「お父さん、今私はあなたと同じたばこを吸っています。しかし、ここは砲弾もマリアンもない平和な場所です。これもあなたが生きて帰って産んでくれたからです」とまじまじと感じました。これからは父がつないでくれた命のバトンに感謝しながら生きていきたいと思います。